

上野殿御返事

弘安二年十一月六日 五八歳

唐土に竜門と申すたきあり。たかき事十丈、水の下ることがつぴやうがやをいをとすよりもはやし。このたきにをく^多のふなあつまりてのぼらむと申す。ふなと申すいをののぼりぬれば、りうとなり候。百に一つ、千に一つ、万に一つ、十年廿年に一つものぼる事なし。或ははやきせにかへり、或いははし・たか・とび・ふくろうにくらわれ、或は十丁のたきの左右に漁人どもつらなりみて、或はあみをかけ、或はくみとり、或はいてとるものもあり。いをのりうとなる事かくのごとし。

日本国の武士の中に源平二家と申して、王の門守りの犬二疋候。二家ともに王を守りたてまつる事、やまがつが八月十五夜のみねよりいづるをあいするがごとし。てんじやうのなんによのあそぶをみては、月と星とのひかりをあわせたるを、木の上にてさるのあいするがごとし。かゝる身にてはあれども、いかんがして我等てんじやうのまじわりをなさんとねがいし程に、平氏の中に貞盛と申せし者、将門を打ちてありしかども、昇でんをゆるされず、其の子正盛又かなわず。其の子忠盛が時、始めて昇でんをゆるさる。其の後清盛・重盛等、てんじやうにあそぶのみならず、月をうみ、日をいだくみとなりనికి。

仏になるみち、これにをとるべからず。いをの竜門をのぼり、地下の者のてんじやうへまいるがごとし。身子と申せし人は、仏にならむとて六十劫が間菩薩の行をみてしかども、こらへかねて二乗の道に入りనికి。大通結縁の者は三千塵点劫、久遠下種の人の五百塵点劫生死に沈みし、此等は法華經を行ぜし程に、第六天の魔王、国主等の身に入りて、とかうわづらわせしかばたいしてすてしゆへに、そこばくの劫に六道にはめぐりしぞかし。

かれは人の上とこそみしかども、今は我等がみにかゝれり。願はくは我が弟子等、大願ををこせ。去年去々年のやくびやうに死にし人々のかずにも入らず、又当時蒙古のせめにまぬかるべしともみへず。とにかくに死は一定なり。其の時のなげきはたうじのごとし。をなじくはかりにも法華經のゆへに命をすてよ。つゆを大海にあつらへ、ちりを大地にうづむとをもへ。法華經の第三に云はく「願はくは此の功德を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」云云。恐々謹言

十一月六日

日 蓮 花 押

上野賢人殿御返事

此はあつわらの事のありがたさに申す御返事なり。